

周作人にとっての武者小路實篤

——トルストイをめぐる差異

宮 川 尚 子

序

近代中国文学の基礎を築いた一人であり、魯迅の実弟である周作人と、白樺派の代表的作家武者小路實篤——この二人が「新しき村」の運動を通じて交流していたことはよく知られたことである。この新しき村の運動は、武者小路が青年時代にロシアの文豪トルストイの感化を受けたことから始まる。周作人は、新しき村建設当初からこの運動に興味を示し、それ以後、一九二六年に至るまで武者小路への傾倒を語った幾篇かの文章を書くことになる。

新しき村は一九一八年十一月から建設に着手され始めたが、それ以前の同年四月に、周作人は武者小路の反戦思想戯曲『或る青年の夢』（一九一七年一月・洛陽堂）を手に行っている。周作人にしてみれば文学においてはアマチュア的な学習院出のお坊ちゃんに、当時の中国知識人達が心を痛めていた「民衆覚醒」の一つの

解決策を提示されたわけで、彼はいたく衝撃を受けた。つまり、この本との出会いが、作人が新しき村の運動に従事する契機となったのである。周作人は、『新青年』四巻五号（一九一八年五月）に「武者小路君の『或る青年の夢』を読んで」を書き感想を述べているが、ここに既にトルストイの名が見えることに注目したい。作人は、武者小路と共に平和主義文学者の代表としてトルストイを紹介し、その三ヶ月後にはトルストイの非戦論的な作品の翻訳を自ら手がけている。加えて、最初の新しき村の紹介文「日本の新村」においても、トルストイと武者小路の運動を比較してみるなど、新しき村がトルストイの影響下であることを前提として話が進められている。つまり、周作人自身、武者小路を、そして新しき村を考える時、トルストイを切り離して考えることができなかったと思われる。小論では、トルストイを介した二人の作家が何を共有し、また周作人の中で武者小路に対する意識がどのような

に変化したのか、従来言及されてきた新しき村運動関連の紹介文に留まらず、この時期の評論全般に視野を拡げて検討してみたい。

一

周作人が傾倒した新しき村運動は、青年武者小路とトルストイの出会いが出发点になる。武者小路は当時のことを回想し、「感心しない作品と」(一九一五年『後ちに來る者に』所収)の中でこう述べている。

自分は日本のいろ／＼の人から感化を受けた。しかしそれを皆あはせてもトルストイから受けた感化には及ぶまい。自分はトルストイに加藤直士氏の訳した我宗教で先づ感動し、我懺悔、福音書解説(?) 神の国は汝曹の衷にあり、等で感化を受けた。

……中略……十九か二十の時だった。

この回想を見てもわかるように、青年武者小路がトルストイに対して熱烈な関心を寄せていたことは言うまでもない。日頃から「自分より優れた人間が学校にゐると思へなかった」(『或る男』)武者小路は、トルストイの思想を知れば知るほどトルストイに敬服していった。大学へ入学する頃には、「待たれてゐる人は、もしかしたら自分ではないか……」(『或る男』)と、本多秋五氏のいう「メシヤ意識^{注1}」が現れていた。そして、トルストイの影響によ

って文学に没頭する、というよりむしろその思想的方面に傾倒して、「世の中を良くするため」に東京帝大文科社会科に進んだのである。

しかし、武者小路は一生を通じてトルストイアンであったわけではない。トルストイは、無我の愛、男女を問わない完全な純潔、働かずして食うべからず、という教えを説いた。が、それは経済的苦労などしたこともない御公家出身の、まだ若い放恣奔放な武者小路少年を悩ませるものでもあったようなのである。

一体トルストイのものゝ云ひ方(多く論文)は他人を強いる処が強すぎる。トルストイは何時でも『そつちへ行つてはいかんこつちへ来なくつてはいかん』と云つてゐるやうな気がする。

(一九一三年「今の自分とトルストイとマーテルリンク」『生長』所収)

つまり、彼が意の赴くままに行動しようとするれば、必ずトルストイ主義の禁忌に触れることになり、主義に忠実であろうとするほど、その教えと自分の境遇を含んだ現実のギャップに苦しむことになった。こうして持ち前の自己に対する自信と、芽ばえくる「メシヤ意識」も手伝い、トルストイを追い越すことを試みようとするのだが、最初から敵わぬ相手であるのは承知の上だった。トルストイに敬服しているが故にこそ起こるこの矛盾した苦悩に、

武者小路は苦しめられていたのである。

この苦悩から脱け出す足掛りとなったのが、むしろ「反トルストイ」^{注2}ともいべきマーテルリンクであった。武者小路は、「自己の為」及び其他について（一九二二年）においてこう告白している。

マーテルリンクは「自己の如く隣人を愛すると云つたつて第一自己を愛することを知らなければ始まらない。又自己の如く隣人を愛するのでは未だたらぬ。他人の内の自己を愛するのでなければ」と云ふやうなことを「智慧と運命」の内に申しておりましたやうです。この言葉を今より五六年前に読んだ時私には天啓のやうに響きました。私がトルストイ主義に反抗しだしたのはこの時に始まつてゐるやうな気がしてゐます。

これによって彼は胸のつかえがとれたやうな気持ちになり、人類の事も考えるが自己の事も考えるという、人類の中の個人、「人類主義的個人主義」とも言うべき新しい観点を見い出すのである。そしてこの武者小路的新思想を実行すべく、新しき村運動が展開されていった。

一方周作人はこの思想の影響を衝撃的に受けとめていた。彼はまず新しき村を忠実に中国へ紹介することに徹する。へ日本の新村（一九一九年三月・《新青年》六卷三号）では、人類主義と個

人主義がうまく融合されている箇所を、ほとんど武者小路の『新しき村の生活』（一九一八年八月）などから抜き出して紹介している。人類主義という大きな枠の中の個人として、人類と個人をフランスよく見出ししているのが目につく。また周作人が武者小路の言葉を借りて、「新しい時代が来るべきである。遅かれ早かれ世界的革命が発生するべきである。」ことを繰り返して訴えている点も、「民衆覚醒」の方法が新しき村であると信じて止まない、作人の希望に燃えた心持ちが窺えるのである。

「人類の中の個人」——この思想は、当時の周作人の著作にも多大な影響を与えている。その傾向は、彼の代表作であるへ人の文学（一九一八年十二月・《新青年》五卷六号）において、最も顯著に表れていると言えよう。

このような「人」の理想的な生活とはどのようなべきか。まずは人類の關係の改良である。お互いみな人類であるが、又各々が人類の一人である。従つて、自分を利するが他人をも利する、他人を利することが即ち自分を利することでもある。そのような生活を営まなければならない。第一に物質的生活において、各々が力の及ぶ限りを尽くして、人間の生活（人事）に必要なものを取つてこなければならぬ。言い換えれば、各人が精神と労力を使って肉体労働をし、適当な衣食住と医薬に換

え、健康な生活を保持できることである。

このくだりは、「新しき村に就ての対話」(『新しき村の生活』所収)で武者小路が言う、次の言葉に類似していないだろうか。

人類すべてが、他人を人間らしく生活させることによつて、自己が人間らしき生活が出来、自己を人間らしく生活させることによつて、他人を人間らしく生活させることが出来る……

各自が人類に向つて捧げなければならない労働を捧げることによつて衣食住、健康に生きる為に必要な衣食住をたゞで得られるやうにするより他はないと思ふ。

またさらに周作人は、続く〈平民の文学〉(一九一九年一月・『毎週評論』)においても、

今日、平民の時代では、あらゆる人はみな自立と互助という二つの道徳だけは守らなければならず、どんな慈善ということもない。

と述べる。このようにして、自立と互助、個人と人類という武者小路が提示した見解があちこちに提示されており、作人が新しき村の思想からかなり直接的に影響を受けたことが窺えるのである。

しかし、周作人が武者小路に傾倒していた時期、中国は激動の時代を迎えていた。一九一九年四月のヴェルサイユ会議における列強の中国に対する冷酷な決定、そして続く五四運動である。そ

れ以後書かれた新村紹介文、〈新村の精神〉(一九一九年十一月・講演)では、日本の新しき村の現実―金銭面の苦勞―を心配ないと言いつつも単なる報告に留め、新しき村の理想と現実との差を示唆し始めている。つまり、周囲の変化とともに徐々に彼本来の冷静沈着な態度を取り戻し、やや客観的に新しき村を叙述しながらおしているのだ。加えて、日本の新しき村をモデルにして中国でも「工読互助団」^{注3}が発足したのだが、短期間のうちに解散するという厳しい現実が起る。周作人が落胆したことは、想像に難くない。つまり彼が「民衆覚醒」のために努力してきたことが、中国ではまだ早すぎたことを痛感せざるを得なかったのである。頭の中では理想的だとわかっていても、当初の期待が大きかっただけに、中国における現実には周作人の新村構想を動揺させ白紙状態に置かせることになった。日本の新しき村の現実を知るにつけても、結局理想は理想でしかないことを思い知らされ、この理想を取り除き、現実を見つめ、人類全体を考えるよりまず先に、自分達の土壌を考え直す必要性を感じたのだろう。この挫折は、周作人にひとりひとりの民衆覚醒にはひとりひとりの自覚強化が必要だということを感じさせると同時に、人類という大きな枠組への不信をも抱かせるきっかけとなったのである。

新しき村をユートピア的存在として位置づけさせた思想的中核

は、人類愛と個人の共存という構想であつたわけだが、周作人はこれに対し、彼独自の方向性を模索しはじめた。『人の文学』、『平民の文学』と共に新文学提唱のための三部作である『新文学の要求』（一九二〇年一月、講演）では、以前のように個人と人類の関わりを述べ、人類と個人は衝突しないといいつつ、彼が要求する新しい文学について、人によって名称は異っても実質は帰する所一つであるとして、こう書いている。

個人が人類の一人という資格でもって、芸術の方法を用いて個人の感情を表現するものであり、人類の意志を代表し、人間生活の幸福に影響を与える文学である。

つまり、個人と人類との平衡は保ちながら、個人の持つ意義をなるべく強調するという立場への転換が見え隠れしており、前の二篇とは微妙に変化していると思われるのだ。

そして続く『個性の文学』（一九二一年一月『新青年』八巻五号「随感録」）は、「芸術を作るものは、個性を持った個人である」ことをいっそうはつきり提示している文章と言えよう。それは、武者小路の影響を強く受けた人類主義的个人主義に対する考えが、次第に限定されていく上で、意味のあるものとして捉えなければならぬ。ここでは、「个性的な新文学」の結論として、「自分をまったく抹殺して他人のまねをしないこと」「個性こそ個人の唯

一の所有でかつ人々と根本的な共通点がある」「個性とは保存可能な国粹である」などの諸点が挙げられている。つまり「個性の解放」を中心として、個人対人類、個性と国粹（民族主義）との関わりといった問題に、個人を尊重する点に偏ってより一歩踏み込んで触れていると言えよう。これは完全な個人主義ではないものの、後のより個性性を重視する個人主義へとつながる過程であつたことは確かである。しかし、この結論は、以前のような啓蒙と希望に燃えたものではなく、やや悲観的な感さを感じられるのだ。五四運動の急速な退潮、工読互助団の失敗、新しき村への挫折。さらに尾崎文昭氏の言う「新思想による啓蒙とは全く無関係没交渉に存在する中国の民衆に悲哀を感じ」^{注4}深まっていた「大衆不信」。これらによって理想に疑いが生じ、樂觀でなくなつて、人類愛が現実性をもたないことを知らされていく。こうして周作人に残されたものは、己の立場をどう生かして人類と関わるべきか、ということであつたかに見えるのである。

周作人は、一九二一年夏の療養生活以後新しき村について語らなくなつた。これは、一九二六年までの彼の活動を整理すれば明確なように、一九二一年以後は武者小路に関しても、新しき村とは一切関係ない作品ばかり翻訳するようになる。それらの作品が一つのテーマに沿って選択されているとははっきり言いがたい。

しかし強いて言えば、日本文学独特の“人情”を見出すためのものだったとも考えられるだろう。このモチーフは、周作人が日本文学を見る一つの重要な視点と言えるわけで、武者小路に対しても、民衆覚醒のための理解者としてではなく、一人の個性をもった日本作家という、いわば他の作家と同じ視点で捉え直されるようになったと行うことができる。

二

周作人の軌跡を、以上のように武者小路との出会いからその影響下での人類主義、そしてその挫折と迫る時、同じ思想に共鳴したはずの両者の分岐点は何だったのか、という問題が改めて生じてくるだろう。周作人が武者小路を紹介するにあたり、トルストイ主義の影響を常に念頭に置いていたことは既に述べたが、実は「日本の新村」において作人は次のように述べていた。

ロシアのトルストイの躬行は総労働主義の実行であった。しかし彼は「手の仕事」を尊重し、「脳の仕事」を排斥した。又、極端な利他を提唱し自己の責任をなくした。なので十分うまくはいかなかった。新村運動は、更に一歩進み、総労働を主張し協力的共同生活を提唱し、一方では人類の義務を尽くし、もう一方では各々が個人に対して自己の義務を尽くすものである。

(傍点筆者)

武者小路にとって新しき村は、「トルストイの対極点に立つて」^{注5}「トルストイの方針とはずいぶんちがう」^{注6}もの、トルストイとの訣別の表現でもあった。だが、周作人にとって新村は、トルストイ主義が「更に一歩進」んだもの、つまりトルストイ主義の延長線上としか映っていない。これは、運動の最中に既に両者の間で考えの違いが生じていたともとれるのではないだろうか。武者小路が、トルストイアンとしてどのような思想過程を辿ったかは既に触れた。また周作人も『北京週報』では、「新思想家というよりも支那におけるトルストイアンとして知られてゐる……」と紹介されたという。^{注7}二人の作家の接点であったトルストイ。しかし、この接点を比較してみることにによって、両者の異質な考えが更に明らかにできるように思われるのである。

一九二〇年『新青年』七卷三号に、周作人は武者小路からの手紙へ支那の未知の友人に与うるを翻訳して載せた。その文章に対し、陳独秀は次のような感想を寄せる。

私は十数年前、トルストイも中国の友人に手紙を与え、中国人に、農業を放棄するな、西洋の富強を羨むな、立憲政治を崇拜するな、武力による抵抗主義をするな、と勧めていたのを覚えている。当時の中国人は彼の堅固な良言を理解できなかった……

一九二〇年の十数年前と言え、周作人が日本に留学していた頃である。当時の日本文学界では、一八八六年に「戦争と平和」の冒頭部分が紹介されて以来、トルストイ研究が活発に行われていた。このような背景において、魯迅と共に『域外小説集』などでロシア文学の翻訳を試みていた周作人が、日本文壇でのトルストイブームを見逃すはずはない。従って周作人も、トルストイに関する情報は日本から得たものが多く、未だトルストイが浸透していない中国においては、トルストイの知識が豊富な人物として見られたのだろう。

一九一八年の『新青年』五巻五号に、作人はトルストイの『空大鼓』を載せ、その後記にトルストイの小説で中国語訳が出ているものを五篇紹介している。だが、「復活」や「アンナ・カレーニナ」以外は絶版であったり、古文を用いているため著者のもともの主旨が失われ役に立たないことを指摘し、続けてこのように述べている。

この他短篇で各新聞上に訳載されたものも、知る術がない。余りに融通無礙に意識しすぎているためと、又各々原著者の姓名が署名されていないので調査が難しい。

最後の「原著者の姓名」は、たいへん重要なことである。なぜなら、いかに中国においてロシア文学が整理されていなかったか、また

人道主義を唱えたトルストイにいかに関心を示されなかったかが現れているからである。実は同じ「トルストイ」と称しても、十九世紀に生まれたトルストイという名の作家は三人いる。アレクセイ・コンスタンチノビッチ・トルストイ、^{注8}アレクセイ・ニコラエビッチ・トルストイ、^{注9}そして「人道主義を唱えた」レフ・ニコラエビッチ・トルストイである。特に周作人は、歴史小説「銀公爵」がアレクセイ・コンスタンチノビッチ・トルストイの作であり、レフ・トルストイのものではないことを例に挙げ、このように人を混乱させることが理解を妨げる原因になることを述べているのである。当時の中国に紹介されたトルストイ文献が周作人の言う通りならば、武者小路が先ず感動を受けたという「我宗教」、「我懺悔」などの著作は手にはいらなかったことになる。やはり中国においてはトルストイに関する情報が不足していたと言える。トルストイに興味を示さないこうした土壌にいくら新しき村の思想を鼓吹してみても、「中国ではまだ早かった」ことは明らかで、政治的社会的環境を別にしても、中国における新しき村運動の失敗は容易に想像がつくのである。

『空大鼓』の後記では、トルストイだけでなく他の文豪についても、理解のためにはまずきちんと記録を残す体制を作ろうと訴えかけているが、周作人自身によるトルストイの翻訳はこの一作

だけであつた。これは、トルストイについては一度翻訳が出たにもかかわらず、中国ではあまり興味が示されなかったことを考慮し、武者小路を理解する手助けとするために一作を紹介したと考えられる。その後の武者小路の思想を、トルストイの延長上に、それより「更に一步進んだ」ものと考えていた周作人は、もう一度トルストイについて一から紹介するよりも、また文面上のみで反戦主義を展開するよりも、新しき村運動を紹介する事が、民衆覚醒を早急に必要とする中国にとって時代に合っていると考えたのだらう。しかし、作品の翻訳は一作のみであるが、作人自身の文章には、武者小路に取り込まれていないトルストイが見い出されることもあるのである。

《空大鼓》の中で、周作人はトルストイの文芸を「人生の芸術」と言っている。この言葉が彼の文学革命においてキーワードとなつたことは、例の三部作を読めば容易にわかる。《人の文学》においてはまだ明確に主張されていないにしても、《平民の文学》の中では「人生芸術派」と「純芸術派」を対比させ、表面だけでなく、根本からの平民文学を定義しようとしている。又《新文学の要求》では、「芸術派」でもなく「人生派」でもない、「人生の芸術派」論を打ち出している。この「人生の芸術派」とは、文芸の究極の目的であり、著者の感情を通じて人生に触れなければなら

ない。言い換えれば、著者は芸術の方法を用いて人生の感情を表現しなければならず、読者に芸術の楽しみと人生の解釈を与えるものだ、と解説している。もっとも内容的に見れば、同じ「人生の芸術」といっても、二年の月日を経ているので、トルストイに対するコメントと《新文学の要求》のそれとは意味合いが違ふようではある。トルストイは時を経るにつれ、「人生の芸術派」ではなくなつていった。のちには、文芸を倫理の道具とし、一種の壇上の説教とする「人生派」に分類されてしまふ。とは言つても「人生の芸術派」という一貫した基盤の枠組にはトルストイが入る訳で、そこでは彼が強く共鳴した人類と個人の思想が重なり合っていると言えよう。つまり、周作人は自分自身の著作上で、武者小路のように宗教家としてではなく、芸術家としてのトルストイを自分なりに取り入れていたと思われる。裏を返せば、その点が著作面において、武者小路の焼き直しではないと彼に言わしめる所以なのであらう。武者小路が、トルストイを一人の思想家として常に追い越そう、追い越そうと葛藤し、苦悶と恐れを抱き、ついにはトルストイを非難するに至るのに比べ、周作人はうまうトルストイを吸収し、自分の思想の要素としてしているのである。この点は、他のロシア作家を見る彼の視点によって更に明確である。周作人は、《新青年》（四巻四号・七巻一号）上に掲載したロシア

文学の翻訳に関わる後記において、アンドレーエフやクプリーン^{注10}といった人達とトルストイを比べ、優劣などを書き加えている。

こうした傾向は、トルストイという人物が、作人の冷静な視点によって分析され、研究され、結果的には彼の文芸批評の基準の中に取り入れられたことを表しているといえよう。

もとより周作人が、一九二一年の思想転換以降は、新しき村と離れると共にトルストイからも離脱したことは付け加えておかなければならぬ。これについては、『自己の庭』に収められた貴族のものと平民のもの、〈詩の効用〉において、トルストイの人道主義文学だけではなく、その芸術自体に批判を浴びせているのを見ればわかる。また尾崎文昭氏が、「以前の立論のほとんどがトルストイを支柱としていたのに対し、そのトルストイにまで嫌疑が及んでいる。」（『陳獨秀に別れるに至った周作人』）とも指摘している。以前の立論のほとんどがトルストイを支柱としていた……というのは些か言い過ぎのようにも思われるが、この時点で、トルストイが周作人にとって過去の人となってしまったことは確かであろう。

このように、トルストイをある意味で客観的に吸収していた周作人ではあるが、一つの点だけトルストイに正面から攻撃を加えていた。それは女性観である。

三

女性問題は、周作人が道学や儒教に反抗する上での大きな柱となっており、『新青年』その他の誌上で、常に中国での健全なる性道德の樹立を鼓吹していた。例えば、武者小路の非戦論的な作品を紹介したと同じ号に、与謝野晶子の〈貞操論〉（原題「貞操は道德以上に尊貴である」）を発表し、同時代知識人の中でも、ずばぬけて高いレベルの見解で女性問題の核心に迫り、他の知識人達を触発することになる。^{注12}彼は今の時代には合わない長年の伝統として、女性に関わる種々の束縛（貞操、纏足、インドの「サチ」^{注13}に及ぶまで）を取り除くよう提示し、中国人の心性にこびりつく儒教倫理を鋭くつくと共に、人類の中の個人という武者小路的な思想に立ち、女性に対する弁護を開始するのである。この新思想を浸透させるためには、敬服していたトルストイにまでメスを入れ、より進んだ方向へと人々を誘導するのである。

彼は、一九一九年の『新青年』六卷二号でチェーホフ作〈可愛人〉の翻訳を載せた後、トルストイのこの作品への評価に異論を提起している。男には決してできない出産や、愛する者への献身を描くチェーホフの女性の描き方を賞讃するトルストイの批評に、反論を加えているのだ。その後翻訳した他のロシア作家の作

品を見ても、女性観についてはトルストイとはっきり意見が異なること、トルストイをかなり冷静な目で見ていたことが伺える。

ここでの反論の内容はこうである。

トルストイは人道主義を提唱し、この人道の中には、ただ唯一の道があるだけである。両性の差別はできない。もしも女子の天分上、男子と違うと軽く断定してしまえば、二つの異なった道ができ、円満にできない。…略…愛と生殖この二つは専ら女子の事ではない。男子は既にこの二つの事の外に、まだ多くの人の事業をしてきた。女子もそうである。女子は男子を愛し、子供を育てる、その他にもまだ人としてしなければならない。女子は夫と子供に対しては、妻であり、母であり、その上人類に対しては個人であり、自分自身に対しては「唯一の所有者」である。

現代でも、真にこれだけの見解を持った男性（もしくは女性においても）がどれほどいるだろうか、と思わず考えさせられるほど徹底した「人の生活」の姿勢である。彼が中国文化批判を語り、中国で「人の生活」を望む時、女性問題を見逃す訳にはいかなかった。逆に言えば、「人の生活」こそ自分の理想であるのだが、その問題を考える上で立ち足はだかつてくるのは、やはり中国の背後にある伝統であった。そこで、

中国でこのような問題を語るには、最初から出発せねばならない。まだ人の問題が解決されていないのだし、女性、子供の問題は言うまでもない：（『人の文学』）

と現実を冷静に見つめ、その理想と現実の溝を埋めるべく女性問題を展開していくのである。だから、木原氏も指摘したことだが（12）、彼は中国の女性を考える上で、与謝野晶子の言う女子の経済的自立や、ましてや男女平等主義の婦人運動を繰り広げた訳ではなかった。彼の発言は、あくまで伝統批判として、女性達が各々で人類の中の個人であることを自覚し、また男性もそれを認めるといふ「共産時代」を掲げ、全ての人々を「人の生活」に目覚めさせるといふものであった。一九一八年の『新青年』（第五巻四号）随感録三十四（『談龍集』所収時に『愛的成年』と改題）の中でエドワード・カーペンター（『愛の成年』）を援用して、こう言う。

女子の経済的独立を基礎としなければならないのも一定の道理である。だが、女子の経済的独立を妨害しこの問題を完全にひっくりかえしてしまう根本的な難題がある。それは出産である。

私達は忘れてはならない。もし社会上の大改革がなければ、女子の解放もまた完成できない、ということ。私達が商人制

度―人類の努力、人類の愛情を取り引きし売買する制度―を完全に取り去り、別に新しい理想と新しい習俗を定めた時にならなければ、女子は本当の自由を得ることができないのだ。……略……女子の自由は、社会の共同制度をもって基礎としなければならぬ。

また、〈文学改良と孔教〉（一九一八年『新青年』第五卷六号）でもつぎのように言っている。

男女問題が円満に解決するには、共産時代でなければ成功できない。だが、部分的解決は今も実現できる。それは「衣食足りて礼節を知る」時であるが、今の社会では恥も外聞も知らないのに、どうして貞操を知ることができようか。

周作人が訴えた「共産時代」という言葉には、やはり新しき村の「自立と互助」という信条が思い浮かぶ。「人の生活」を営むための伝統打破、特に女性問題を考える上で、男女共に人類の一員として生きる新しき村の思想に、彼が大いに注目したのもわかる。

周作人は、既に述べた〈日本の新村〉で、わざわざ男女間の道徳について武者小路の言葉を引用している。

淫売婦のないことはたしかだ。一夫一婦の認められてゐること
もたしかだ。強姦が認められてないこともたしかだ。その制裁
法は皆で考へればいゝとおきたい。恥を知るものは恥を知

らないものより尊敬される。それは実際にぶつからないとわ
りにくい問題だ。たゞ金がさう云ふことに暴力をふるふことが
出来ないことだけは確かだ。

私がここで「わざわざ」と記したのは、この文章が周作人の期待を満たしたとは思えないからである。それは周作人がこの引用部分において、彼自身のコメントをつけていないことでも感じられる。実は、この文の前後で武者小路本人は次のように言っている。

それはむづかしい問題の一つだ。僕ももつと考へて見たく思つてゐる。……略……問題としてとりあつかふには微妙すぎる。

しかし恥ぢしらずの鉄面皮な、うかれ男や女が多くつては少し困る。さう云ふ人間は蔭でこつそり、第三者に迷惑を与へず、

お互にも迷惑をうけない程度でやるなら見のがしてもいゝ……略……厳肅な空気で、童男、童女の清い心になるべく汚さないやうにしたい。

新しき村の思想について「自分の精神にはまちがひがないと思つてゐる」（『新しき村の生活』序）と豪語した武者小路にしては、彼らしからぬ、あやふやな見解といえる。結局のところ、武者小路の女性に対する考え方は、周作人が理想とするようなものではなかった。例えば、新しき村発足前の『生長』（一九一二年）において是这样言う。

子供にとつて愛してくれる大人は幹である。女にとつて愛する男は幹である。男にとつて人類は幹である。幹をはなれたものは生命を愛することを知らない。女は愛する男を生長させる為にある。しからざれば愛する男の子を生みそれを育てる為にある。自己が生長する、しないかは第二以下の問題である。(例外の女もあるさうである。)

この文章を見ると、女性を完全に男性に付随するものとしており、周作人の意見には及ばない。武者小路はこの文章を書いた年に結婚しているが、失恋を乗り越えてたどり着いた結婚への希望の表れか、もとの自分に対する自信の表れがそう言わたのか。いずれにせよ、武者小路は自分の取った視点から、当然のように女性の立場を除外視している。これは当時の、特に文学青年に多く見られる現象であるだろうが、武者小路にもそれが色濃く映っているのである。本多秋五氏はいう。

「白樺」派の人々には、女性を心底から対等の人格とみとめぬ傾向があり、……略……彼等は観念のうへでは女性を尊敬してゐるが、いざ実際となると、どうしても一だん下のものとして取り扱つてしまふのである。(『白樺』派の文学)

では、武者小路も、トルストイと同様人道主義を二分する見解であつたのだろうか。

もちろん、武者小路は観念的には女性問題の意味を充分わかつていたし、女性に対して真剣に考えていた人物と言えよう。トルストイ主義に心服していた時期には、トルストイの「純潔」に基づいた禁欲主義と戦い、好きな女性を夢の中で想うだけでも、「自分は罪人ですと神の前に跪きたい」と嘆いていたほどであったが、前述のごとく、そのトルストイの諸々の意見に反発するに至る。その反発する理由として彼が出した答えが、大津山氏の言葉借りれば、「自然の肯定」だった。この考えは、武者小路にとって格好の答えだったと思える。それからというものの、彼はこの「自然の肯定」によって、大胆に、そして素直に女性に対する意見を述べるようになる。もともとまじめな性格でもあり、遊びとしての女性は「自然」という枠の中に認めはしなかったようだが、正直な所、

要するに自分は虫のいゝ男の一人である、女を独立したものと認める以上は、自分の愛すべき女としてより女に価値を認める人間だ。(『雑感』『白樺』その他)

という見解までもらしていたのであつた。この考えは、新しき村発足時にもそのまま受けつがれている。村の中の男女の道徳に関しては、先程も引用したように、「人の生活」という自覚のもとにあとはみな意見に任せる、というものであつた。また、もう

一つ彼の女性に対する考え方として、「女は女らしく」という言葉
を念頭に置かなければならない。この言葉は新しき村についての
論文で繰り返し使われている。つまりは女も労働をするが、女
の肉体を女らしくしない労働はさせない、できれば一家をもって
子女を養う労働をしてほしい、というのがその主旨である。一見

すると、周作人が後に達した性の個別性を重視する方向と類似し
ているように思える。だが、周作人がエリスやフロイドの影響を
受け、「性の違いを単に身体的、生理的な領域に留めず、言わば
全人格的な問題として捉える」という高尚な考えをもとに辿り着
いたものと比べると、武者小路のそれは全くレベルが違う。武者
小路の女性らしさは、当時の大半の男性が希望したように、「女
には女らしい姿」で、「女らしい上品さと優しさ」をもって、女
には不似合いな肉体労働はせずに、ただただ家庭を守ってもらう
ことであつた。武者小路の人類主義的個人主義からいえば、周作
人がエリスらの考えから見出した答えをすぐ要求してもいいは
ずであるが、実際には個性性どころか、人類の中の一員としての
女性という考えに到達していたか否かすら疑わしいものである。
つまり彼の女性に対する問題意識は、トルストイ時代から、自己
の潔癖と性的欲望の葛藤の問題にすり替えられるものであつたと
言えよう。彼が出した「自然の肯定」という答えは、結果的に自

分の中の女性観を擁護するためのものとなり、その点でだけは自
分の中で解決されたものの、人類としての女性一般の問題は何も
解決されなかった。いや、きっとその考えにまでは至らなかった
のだろう。そこで初期の新しき村でも、従来のままの女性観の原
形が残っていたのである。

結局、武者小路が女性問題に対する答えを形にしたのは、『人
類の本』として三部の冊子を発行したうちの一つ、『女の人の為
に』である。この本は最初一九二二年に刊行されたが、最も古い
記事で、一九二〇年十二月五日の日付であつた。周作人がそろそ
ろ人道主義に疑問を持ち始め、著作面では人類から個人へと視点
を移動させ、女性に対しても性の個別性に注目していく頃、武者
小路はやつと原点からこの問題に着手し始めるのである。つまり、
周作人が新しき村に期待を寄せていた時期には、武者小路は女性
問題にさほど心を費していなかった、という両者の時期的なずれ
が見られる。一九二一年四月五日に書かれた「新しき村に入りた
い女に」の一文を見ればより明確であらう。

今村は、よき男が住むに適當な空気をつくることに成功しまし
た。今度はよき女の住むのに適當な空気をつくりたく思つてゐ
ます。

武者小路の『女の人の為に』で最も注目すべきなのは、周作人

が批判したチエーホフの「可愛い人」(武者小路は「愛しき女」と訳題をつけている)に対するトルストイの批評文を、武者小路も取り上げていることである。^{注15}彼はトルストイの女性観に対する見解として、「かゝる意味の女の新しき村に必要なことを自分は信じるものである」としながらも、『女の人の為に』序」ではこう弁明している。

付録に古く訳したトルストイの感想を加へた。

その感想と、僕のある感想との間に矛盾があるやうに思ふ人があるかも知れない。

それはトルストイのあの感想は女性としての女についてかいたものだ。僕のあるものは人間としての女をかいたものだ。

女は人間であり女性である。女性としては男に対するものとして女はつくられた。トルストイのあの感想は男と女をつくつた自然の意志の一面を實によく見てゐる。そしてそれは男の求める女として、愛する男の忠実なる友としての女をかいた。自然が人間を男と女につくつた意志を敬重してかいた。自分はそれに感心した。

周作人は、トルストイの女性観に対し、愛と生殖は女子だけのものではないと指摘した。しかし、この点を武者小路は男子と女子という二種の人を造つた自然の意志として、「自然の肯定」の範

囲内に認めようとしているのである。この冊子で周作人と同様、人類の中の個人、人としての女性を認め、

第一女の人に要求したいのは独立した人間になることです。他人に制裁されずに自己を統御することです。自分のすべきことをすることです。

と述べる一方、新しき村初期の頃と同様、やはり「女らしさ」を続けて主張する。結局、武者小路は男性と女性の違いを性的欲望と同じように「自然の肯定」として、その違いはどうしようもないじゃないか、といっていることになろう。武者小路はあやふやなままであつた女性に対する問題を「自然の肯定」という枠の中に押し込み、落着かせるしかなかったのである。周作人が、徹底した「人類」という観点から女性問題をとらえたのと比較すると、これは日中文学者の文化的な土壌の違いを示すものであると共に、またこれが武者小路の限界でもあつたと筆者には思えるのである。

結 び

両者の女性に対する見解を見ると、皮肉にもトルストイの同じ文章を媒介として、二人の差異が浮き彫りにされ、考えの分岐点が表示されているように思う。

周作人にとっての女性問題は、人の問題であり、人の生活を営

むための基本、人類の中の個人を軸に論を進め、またそうなるためには男性の協力も必要だと説く。一方武者小路は、最終的には人類の中の一員としての女性、武者小路本来の人道主義的個人主義の観点に基づいて女性を認めたとはいえ、結局のところ、前述のような限界にぶつかってしまった。彼にとっての女性問題の中心モチーフは、トルストイ主義に対する反発に始まる自分と性的欲望の問題、そして自分は俗世間の男達とは違うというメシヤ意識を妨害させないための防衛策が出発点であったと言える。つまりは、ありのままの自己に対する自信と、メシヤ意識が支えた自己との戦いであり、武者小路自身は先に述べた限界を限界とも思っていないからであらう。この考えは、まさしく彼の樂觀的な自己満足の世界を見ているようである。考えてみれば、同じ事が新しき村を巡る二人の関係についても成り立つのではないだろうか。

前述したように、武者小路の新しき村はトルストイに對抗してであり、背後には常にトルストイの影がまわりついていた。自分の考えは信じて止まないが、他人の意識に対しては、新しき村に入りたい者は入れ、そうじゃない者はそれで良いという考えが年を追うごとに強まっていたこと、また周作人が「日本の新村」でも触れていた新しき村と国家について、武者小路が初めから国家と村を相対視していない点をも、大学入学当初の「世の中

の改良」という目的が、実は極めて自己満足的なものに取って変わられていたことがわかる。結局新しき村は、人類愛というカサを着せた武者小路の自我の尊厳、自我肯定、という枠を脱し得ず、世の中のどんな主義にも染まらないユートピア建設に落ちついてしまい、周作人の当初の期待—すべての人々を人の生活に目覚めさせる—とは全く違う範疇に属するものになっていたのである。言い換えれば、同じ人類の中の個人と称してはいても、周作人にとっては、常に中国という土壌を考え人権の自由に基づいた個人の解放であったが、武者小路には、自分を守るための自我肯定であった。こうした点で最初から構想の軸が違っていたと思われるのである。

最近、一九二一年以後の周作人の興味が、武者小路から同じ白樺派の有島武郎へ向かったという研究が発表された。^{注16} この武者小路から有島への傾倒も、周作人の樂觀的観測から悲観的観測への移行と共に、「自我肯定」の武者小路から自らの手で生涯を閉じた「自己否定」の有島への移行と見ることができよう。その根底に、具体的現実的な個に対する、武者小路と周作人、両者の見解のずれがあったと考えれば、事態は更に明確になるのではないだろうか。

注

- 注1 本多秋五『武者小路實篤全集第一巻・解説・解題』（小学館）
- 注2 ベルギーの詩人、劇作家、随筆家。後期の作品には楽天的なものが多く。
- 注3 一九一九年の末、陳独秀、蔣元培、李大釗、故適、周作人らの支持を得、日本の新しき村をモデルにして発足。その波紋は全国に広がったが、結局数ヶ月後に解散してしまふ。
- 注4 尾崎文昭「陳獨秀と別れるに至った周作人」（『日本中国学会報』第三十五集）
- 注5 大津山国夫「トルストイ離反」（静岡女子大学研究紀要・第三号・一九六九）
- 注6 『武者小路実篤読本』（『文芸』臨時増刊・河出書房・一九五五）
- 注7 「初期の周作人についてのノート（Ⅱ）」飯倉照平（神戸大学文学研究会・第四〇号・一九六七）
- 注8 美のための歌人と称して独自の唯美主義に終始した。神秘的傾向があり、古代ロシアに強いあこがれを持っていた。
- 注9 革命前のロシア支配階級の滅亡をテーマとした作品を多く描いた。
- 注10 ゴーリキーの庇護により人気作家となった。
- 注11 チェーホフ、ゴーリキーらと親交を結んだ。反戦思想を描き、センセーショナルを起こした。
- 注12 周作人と與謝野晶子については、木原葉子「周作人と與謝野晶子」（東京女子大学日本文学・第六八号）に詳しい。
- 注13 寡婦が夫の死体といっしょに焚死する習慣をいう。
- 注14 木原葉子氏によると、一九二一年〈子供の抑圧〉（『談虎集』所収）に、このような見方が現れているという。
- 注15 武者小路の引用文は、周作人のものより最後の数行がカットされ短い。又、この作品は武者小路が一九〇六年に訳したものが偶然出てきたので今回取り入れたが、原文の方は「友に貸してなくなった」とある。貸した相手が誰であるのか、また周作人

注16 劉岸偉『東洋人の悲哀——周作人と日本』（河出書房新社）

が同じ文について雑誌に発表したことがあるのを知っていたのかどうか、興味のあるところだが、今のところ手掛りがない。

武者小路實篤の文章の引用及び紹介は、『武者小路實篤全集』全十八巻（小学館）に拠った。

周作人及びその他中国語文献からの引用は、筆者の訳に拠る。
（みやかわ なおこ 一九九三年日文革）